９月議会一般質問口述書

５番議員 木村泰男です。議長の許しを得ましたので、この４年間の総括的な質問を、甲賀市を構成する三つの地形に分類して質問させていただきます。
なお、同僚議員の質問や今までに行った質問と重複する部分のありますことをお許し下さい。

三つの地形とは、最大の面積を占める鈴鹿山脈と信楽山地の山地地形、県下最大の河川野洲川とその支流杣川流域に広がる河谷平野、さらに、この２つの川に流入する小河川が古琵琶湖の湖底を刻んで作り上げた無従谷の里山です。

まず、山地地形に関わって大きく二点について市長並びに関係部長にお尋ねします。

鹿深の地は、かつて東大寺の造営にも用材を供給する森林に覆われた杣人の地でした。今でも山地や里山は、植林の進んだ美しい森林に覆われています。
安い外材が輸入されるまでは、私の住む村にも木を切り、牛を使い運び出すことを生業とする方が多数おられました。また、各家でも、冬場は燃料の薪や炭焼き、山の手入れを行い、整備された山では、また松茸か言うくらい松茸も取れたものでした。私の祖父もその一人で、私は小さい頃炭焼き小屋の傍で遊んでいたことを覚えています。

しかし、我が村で、山の仕事をしてこられた方が昨年お亡くなりになり、ついに山の管理を行う人はだれもいなくなりました。
我が家の小さな山林も、祖父が山に入れなくなった後、その一部を、県の造林公社の分収造林事業として植林していただきました。県内森林の１割を保育管理してきたこの滋賀県造林公社とびわ湖造林公社の２社が、ご承知のように１１００億円以上もの巨額の債務を抱え、立ちゆかなくなっています。
公庫の借入金６９０億円を今後４０年以上かけて私たちの税金で分割償還するとされ、県民にとってもこの債務負担は最大の関心事となっています。

そこで市長にお尋ねします。
我が甲賀市にはこの２社が管理する森林が２２１８ **ha** あり、高島市、東近江市に次ぐ造林面積を有しています。また、甲賀市は、滋賀県造林公社に係る県内１４市町の公社団体社員の１つであり、中嶋市長は理事になっておられます。
このことから､造林公社と甲賀市との間に何らかの関わりがあるのでしょうか。特に債務や管理面についてお教えください。

２点目は、公社造林地の６割が、伐採し丸太にすると赤字になる経営困難な不採算林であると言われています。この不採算林は土地所有者にそのまま返還されるとも聞きますが､甲賀市内の公社造林地にもこのような所はあるのでしょうか。

３点目は、分収造林の契約が、当初は５０年以上経過して伐採し、その収益の６割を造林公社、４割を土地所有者に分配されるとされていましたが、最近の報道では、造林公社９割、土地所有者１割に変更されたとも聞きますが、その説明は土地所有者になされたのでしょうか。また、何年も前に県の方が家に来られ、契約期間を５０年から８０年以上の長伐期へ転換するとの説明がありました、これでは土地所有者への還元はほとんどないのと同じではないでしょうか。このことについて、市は何か説明を受けておられるのでしょうか。

質問の４点目は、造林公社では伐採後は広葉樹林化を図り水源かん養機能を回復させるとしています。本来、杉やヒノキ等の針葉樹林は水源かん養能力が低いと言われています。再度広葉樹林化を図り元の森林に戻すのなら、現在甲賀市に点在する雑木林は、針葉樹や広葉樹の混じった混交林がほとんどであり、現状のままの自然林で手を入れなくてもよいのではないでしょうか。実際、今の時点でも、山の手入れに入れる村人はほとんどありません。

甲賀市の林業振興政策には緑化事業や里山整備等で「健全な森林」への誘導を図るとありますが、健全な森林とはどのような森林をいうのでしょうか。また誰が健全に保つのでしょうか。

再問１．造林公社については、市と直接関係しないことでもあるので、県の動きを見守りたいと思います。

再問２．山の手入れについては、植林された杉やヒノキ林の間伐は間伐材を利用した学習机などの製品へと活用でき、収入を得ることが出来るので森林組合等の手が入りますが、雑木林のような天然林や自然林は収益をあげることはありません。こうした森林にも手を入れるべきなのか。再度伺います。

最後に　先日、湖周道路の長命寺付近を走っているとき、長命寺を取りまく山に広葉樹の枯れ木が点在しているのに気づきました。調べてみると、ミズナラやコナラの「ナラ枯れ」の害が進行しており、大きなナラの大木が軒並み枯れています。幸いにも湖南地域の山で見かけることはないように思いますが、一時の「松枯れ」のようになりはしないか心配です。森林をどう保全するか注目し続けなければならない課題だと思います。質問書にはありませんが、何か答弁願えることがあればお教え下さい。

山地地形の二点目は

信楽山地に取り囲まれた信楽盆地は、県内で唯一琵琶湖に注がない大戸川と信楽川が形成し、かつて信楽の町に入るには、山上からの七曲がりのような峠を越えるか、２つの川の渓谷を越えなければならず、たどり着いた信楽の陶器屋さんの店先には、様々な陶器が山のように並べられ、他の陶業地にはない独特な雰囲気を醸し出してきました。私にとっても、初任としての赴任地であり、退職前の最後の地となったことや、セラミック科のある信楽高校は信楽焼の発展と共にあることもあって、信楽の地と人と焼き物は、私に様々なものを与えてくれました。

今では国道３０７号線や４２２号線が整備され、さらに新名神信楽インターの開設により、京阪神と中京圏はもとより、全国からも容易にアクセスできる観光地となりました。

信楽の観光については、今までより多くの同僚議員が質問してこられましたが、この全国発信する「信楽」をどう生かしていくかは行政や関係者に課せられた重要な課題です。

そこで、確認の意味も兼ねて建設部長と産業経済部長にお尋ねします。

１点目は、信楽観光のネックは、信楽の町を南北に結ぶ道路が１本しかないことと、観光の拠点が分散していて核がないことのように思います。長野バイパスの進捗状況と信楽観光の基地となるような「道の駅」の整備についてお聞かせください。

２点目の甲賀市の「観光振興計画」の策定と、３点目の「観光協会」の統一については、今議会内の同僚議員の質問で何度かご答弁を頂いておりますので、重複することとなりますが、通告を致しておりますので、ご回答いただければと思います。

再問１．観光協会の統一・・・信楽の観光と忍者や街道を現時点で結ぶことは難しい、２本立てでも良いのでは？

大きな２点目は、無従谷の里山に関わって質問させていただきます。

四年前、　議員となって最初の一般質問で、甲賀から伊賀へと続く甲賀丘陵の里山は「無従谷」という他に例を見ない特徴的な地形であることを述べました。それは３００万年前の古琵琶湖の湖底であった所にしか刻み得ない地形だからです。

その里山が脚光を浴びたのは、首都移転の第３の候補地になり、国会議事堂をはじめとする国政の中枢をここに移そうという計画が出された時でしたが、その夢は叶いませんでした。しかし、いまや里山を横断するように新名神高速道路と甲南インターチェンジが開設され、フロンティアパークに始まる企業誘致への道筋が一層推進されるとの期待も広がりました。名阪国道にも近く、草津線と関西線に挟まれた甲賀丘陵は、手つかずの豊かな自然と相まって無限の可能性を秘めた地であると言えます。

甲賀市の丘陵地の開発状況を見ると、北より日野川と思川の間の里山は主に住宅団地、思川と野洲川の間の丘陵は工業団地、野洲川と杣川の間の里山は甲南町では住宅団地、甲賀町では工業団地が開発されています。では杣川より南側の伊賀市へと続く里山はどうでしょうか。現状ではフロンティアパークのみが唯一の工業団地として開発されていますが、他に大きな開発はありません。

そこで市長にお尋ねします。

杣川より南側の伊賀市へと続く典型的な無従谷の里山は､甲賀市総合計画では､甲南ＩＣ周辺を水口と並ぶ「工業・流通業務拠点」と位置づけられていました。しかし、総合計画に基づく「甲賀市都市計画マスタープラン」や「甲賀市国土利用計画」では、新産業用検討ゾーンは甲賀土山ＩＣ周辺地区となり、甲南ＩＣを中心とする地域には新たな計画は何も記されていません。将来を展望するとき、里山とＩＣを生かした企業誘致も視野に入れるべきではないかと言う声も聞こえてきますが、杣川より南側の伊賀へと続く里山は将来に向けて、どのような位置づけがなされているのでしょうか。

２点目は、中山間地の農業振興についてです。

私の住まいする戸数３４戸の上磯尾地区では、高齢化と過疎化に伴う農業経営の行き詰まりと耕作放棄地への対応や、村の環境をみんなで守ることを目的に、ほぼ全戸の加入で、昨年磯尾里山農場を立ち上げました。私もはじめて米作りと田んぼの草刈りに取り組んでいます。

私たちの中山間地の農業には４つの苦労があります。１つは無従谷の重粘土質の水田は、「ふけ田」と言って水はけが悪く、農業機械がしょっちゅう立ち往生します。

２つ目は、山地を背にするため、猪と鹿の獣害に苦慮することです。村の回りは全て電柵と鉄柵と網を張り巡らせましたが、それでもどこから入るのか、猪が実った稲を踏み倒し、米を食い散らかしています。

３つ目は、水利の悪さです。灌漑用水を溜め池に頼るため、雨の少ない年は、水の管理に苦労させられます。
４つ目は、中山間地農業の宿命とも言うべき棚田の草刈りです。構造改善によって耕地は広くなったとは言え、土手がなくなった訳ではありません。草刈りは土地所有者の責任となるため、我が家も１１枚の作ってもらっていた田んぼが帰ってきたため、田んぼより広い面積の土手や、猪に掘り返された土手の草刈りに日々奮闘させられています。

４重苦の中で作った米とこうした苦労のない平地の米も同じ値段。ふけ田で他の作物は作れず、村中の田んぼの作業を仕事の合間の土日に行い、休日もなく働きづめ、こんな農業いつまで続けられるのかという若者の切実な声がほとばしりでます。

そこで市長に伺います。

こうした中山間地の農業の将来を考えるとき、担い手となる若者は少なく、苦労ばかりの多い米作りをいつまで続けられるのかという不安とともに、村の崩壊すら懸念されます。市長はこうした中山間地における農業の今後について、どのようにお考えでしょうかお聞かせください。

再問１．甲賀丘陵の開発・・・伊賀市との連携でアクセス道路の整備より

再問２．中山間地農業の振興・・・最大の課題は、地域や農業の担い手をどう確保するかです。農業への企業参入も効率の悪い中山間地では難しい。村の崩壊の危機が近いうちに到来

大きな３つめの地形は野洲川と杣川の河谷平野です。

この両河川の流域に甲賀市の人口と産業が集中しています。これを支えているのが、野洲川に沿って走る国道１号線と、杣川に沿って走る草津線です。さらに新名神のＩＣが両河川のそれぞれの近くに設置されたのも理にかなっています。今後も甲賀市はこの両河川付近を中心に発展していくものと思われます。そこで、国道１号線と草津線について建設部長に伺います。

一点目は、国道１号線の整備は、湖南市のバイパス部分の供用が始まり、野洲川橋梁部分から栗東ＩＣまでの工事も着々と進められています。一方甲賀市内を見ると、水口町内の４車線となる所は変則の３車線であり、北脇から名坂までと土山町の大野から田村神社前までの整備は未着工です。

国県事業課が行っている国への要望とその反応、工事進捗の妨げとなっていること、国県事業課の国道整備への関わりについてお教え下さい。

二点目は、杣川沿いを走る草津線に関わって、山岡議員の代表質問と重複しますが、甲南駅舎の改築と周辺整備について伺います。

草津線沿線の駅舎とその周辺整備は着々と進められ、今年度には寺庄駅舎も着工され、その周辺整備と相まって大詰めを迎えようとしています。貴生川駅、油日駅、甲賀駅の整備はほぼ終了し、市内で残すは甲南駅のみとなりました。

私は議員となった最初と中間の時点に甲南駅とその周辺整備について市長に質問させて頂きました。

過去２回の市長の答弁は、「平成２１年度を事業着手の目標にして取り組みたい」というものでした。しかし、残念ながら、総合計画に基づく平成２２年度までの実施計画・主要事業には何ら甲南駅への取り組み計画はなく、事業着手の計画年度であった今年度も事業着手の様子はまったく見受けられません。

市長も答弁で、先ず地元の協力の下に、膨大な工費と、長い年月をかけて整備しなければならないと述べておられます。それだけに、国の交付金事業として早期に認可を受け、スタートさせることが必要ではないでしょうか。市から何の説明もないまま、ズルズルと着工が遅れていくと、せっかく盛り上がった地元の意気も消沈してしまいます。

市財政が危機的状況にあることや、政権交代による政策転換から、大きなプロジェクトの取り組みが難しいことは理解するところです。

市民の皆さんへの説明責任を果たしながら、息の長い取り組みを続けるための、今後の見通しについて、市長のお考えをお聞かせください。

最後に　　国民の９割が中流意識を持てた時代から、いつの間にか安定して生きることが難しい時代になってきました。また、国や県の指示に従っていれば運営できた行政も、独自の判断が迫られる時代となりました。議会も行政もこうした時代に対応できるよう「ＣＨＥＮＧＥ」「変革」が求められていることを強く感じることを申し上げて、質問を終わります。